

◆ 実 践 報 告

教育方法論の授業実践に関する一考察

～学生の素朴教育観から授業のあり方を考える～

A Report on Teaching Practice of “Teaching Method”: through student’s naive theories of education

田中 浩司*

はじめに

本学における「教育方法論」は、教職免許法施行規則第6条における、「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）」に位置づく講義形式の授業である。同科目は、教師の教育行為に加えて、生徒の学習形態を含む幅広い教育の方法について理解し、その基本的概念の理解と技術の習得を目的としている。履修者は、教職を目指す、あるいは教育実践に関心の高い1，2年生を主としており、特に、教員免許取得を予定している学生にとっては、教科教育法をはじめとした、具体的な教育技術を学ぶための導入的授業となっている。

上述の通り、本授業は具体的な情報機器の使用法を含め、多様な学習形態を実践的観点から学ぶことを目的としている。そのため、授業形態も教員から学生への一方向的なものだけでなく、学生同士の討論をふまえたバズセッション形式、報告者が他のグループに入り他グループの議論の展開を促すワールドカフェ形式など、多様な形態を取り入れている。また、同一グループで繰り返し議論できるように、自らの所属グループを初回授業時に指定し、グループワークを実施する場合には同じメンバーで議論させるといった工夫も行っている。

また、平成24年中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」において指摘されたように、今日の学校現場は、「いじめ・暴力行為・不登校等生徒指導上の諸課題への対応、特別支援教育の充実、外国人児童生徒への対応」といった多様なニーズを持つ子どもへの対応に迫られている。将来教職に就く学生は、限られた経験を通して作り上げてきた子ども観、教育観を拡張し、多様な子どもの存在と子どもの生活状況に応じた教育のあり方について理解を深める必要がある。

そこで、教育方法論の講義では、学生がもつ教育観を共有し、自分とは異なる教育観に触れることを目的としたグループワークを取り入れている。

具体的には次のような手続きをとる。まず、ワークシートに、①自分が思い描く子どもの姿を記入し（子ども像）、②その子どもに必要な教育とはどのようなものか、教師の役割を記入する（教師像）。次に、③グループワークを通してそれぞれの子どもの姿、教師の姿

*都市教養学部 人文・社会系
人文科学研究科

を交流し、その感想をまとめる。さらにその後の授業で、教育観についての歴史的変遷について講義を行う。

本稿では、学生が自らの想定する子ども像と教師像を記載したワークシートの記述内容の分析を通し、学生がもつ素朴な教育観を可視化すると共に、学生の教育観を拡張するための教育方法論の授業のあり方について検討することを目的とする。

方法

調査期間：

2018年11月

調査対象者：

本学教育方法論を受講した学部1年生から4年生。

ワークシート作成方法：

- ① 子ども像の記入：ワークシートに「子ども」といった時に想像する子どもの姿を記入する
- ② 教師像の記入：想定した「子ども」に必要な教育とはどのようなものか、教師の役割について記入する。
- ③ グループで各々の子ども像、教師像について発表し、意見交換を行う
- ④ グループワーク全体についてのコメントを加筆する。

倫理的配慮

本研究への協力を口頭で依頼し、研究協力を承諾する場合はワークシートに学年を記載し提出する旨を伝えた。本講義には50名の参加者があったが、その中から36名の協力を得た。また、プライバシーの保護を目的として、データ収集の年度は記載しない。

結果と考察

1. 子ども像に関する記述分析

学生の記述した子ども像について分析を行ったところ、以下の5つの特徴が見出された。

① 相貌

子どもの顔貌や身体的特徴についての記述

例) ぽっちゃりとしている

② 発想力

Table1 子ども観の学年比較

	相貌	発想力	活動性	純粋性	対人技能	合計
1年生 (9名)	5	5	6	5	4	25
2年生 (23名)	10	3	17	6	12	48
3年生 (5名)	1	2	4	2	1	10
4年生 (2名)	1	0	2	1	1	5
合計	17	10	29	14	18	88

注) 1人の学生が複数の特徴を記述する場合もあるため合計数は回答者数を超える

子どもの好奇心や様々な物事に向けられる関心についての記述

例) 好奇心が強い

③ 活動性

子どもが多様な活動に積極的に取り組む姿勢についての記述

例) 元気で活発。元気に遊び回っているイメージ。

④ 純粋性

子どもの素朴さについての記述

例) 純粋無垢で素直

⑤ 対人技能

子どもの他者とのコミュニケーションの特徴についての記述

例) 人の話を聞かない

子ども像に関する記述について、上記の5つの特徴から分類した。なお、同一の学生が、複数の相貌的特徴を記述した場合でも1としてカウントした。結果は、Table1の通りである。

これらの結果から、学生39名中、過半数である29名が「活動性」を特徴とした子ども像を記述していた。また、活動性の内容は、「天真爛漫である」といったポジティブな記述が多くを占めていたが、「落ち着きがなく直ぐに怪我をする」といった、少数ではあるが、活動性が高まることによって生じるネガティブな結果について記載されているものがあった。

また、次に多く見られた「対人技能」については、「他人のことを考えず、思いついたことをすぐにやってしまう」といったネガティブな特徴として記述されていた。こうしたことから、学生の中では活動的ではあるが、社会的技能が未熟な子ども観を多く持っていることがうかがわれた。

2. 教師像に関する記述分析

教師像に関する記述内容について分析を行ったところ、教師の姿勢に関する記述（教師姿勢）と、子どもに身につけさせたい能力に関する記述（能力期待）に分けられた。

有効回答人数36名中、教師姿勢24名（合計28エピソード）、能力期待31名（33エピソード）が抽出された。

さらに、教師姿勢と能力期待について、分析を行った。その結果、教師期待、能力期待それぞれに4カテゴリーに分類できた。分類内容とその定義については下記に記載する。

教師姿勢の下位分類

1. 規範提示

生徒に対して明確な枠組みを提示することを重視するもの

例) 子どもが好きなように生きていくうえで、立ち止まったり、路を外れそうになっ

たりしたらサポートする。

2. 主体保障

生徒自身で考えることを重視するもの

例) 子どもの好奇心や発想力をつぶさないようにする。

3. 経験保障

生徒の経験を積み重ねられるようにするもの

例) やってみたいと思うことはさせてみる。

4. 経験共有

生徒と教師とが同じ活動を共に経験することが出来るようにするもの

例) 一緒に遊んで上げる。

能力期待の下位分類

1. 個性尊重

子ども自身で物事を考えられる力を身につけさせる。

例) 悪いこと、良いことをちゃんとはっきりと分かるように教える

2. 自己制御

子どもが自らの行動をコントロールできるようにする。

例) 落ち着きを持たせ、遊ぶときと真面目に勉強したり本を読んだりするときのメリハリが付けられるようにする。

3. 社会技能

Table2 教師姿勢の回答人数

	規範提示	主体保障	経験保障	経験共有	計（人）
1年生	2	2	0	0	4
2年生	7	4	2	1	14
3年生	5	0	1	0	6
4年生	0	0	0	0	0
計（人）	14	6	3	1	24

Table3 能力期待の回答人数

	個性尊重	自己制御	社会技能	社会意識	計（人）
1年生	2	4	4	2	12
2年生	2	4	5	5	16
3年生	0	0	0	1	1
4年生	1	0	1	0	2
計（人）	5	8	10	8	31

社会規範に応じた行動が出来るようにする。

例) 自分でも良い事はどのようなことか、なぜよいこととされるのかについて考えてもらう。

4. 社会意識

社会の一員としての意識を身につけられるようにする。

例) 集団の中の一人であることを自覚させる。

学生 36 名中、教師姿勢に言及した者が 24 名、能力期待に言及した者が 31 名であった。また、教師姿勢の中でも、もっとも多く見られたのが規範提示（14 名）であり、次いで主体保障（6 名）、経験保障（3 名）、経験共有（1 名）が続く。また能力期待についての回答は、社会技能（10 名）がもっとも多く、続いて社会意識と自己制御（それぞれ 8 名）、個性尊重（5 名）が続いている。

これらの結果から、学生の多くが規範を提示し、また、社会技能を伝達する役割としての教師像を持っていることがうかがわれる。また、能力期待についての記述についても、個性尊重について 5 名が言及しているものの、全体的には社会意識や自己制御といった社会的適応能力を身につけることに教育の目的を置こうとする姿が見て取れる。

総合考察

本研究では、子ども像と教師像についての記述分析を通して、教育方法論の受講生のも

つ素朴な教育観を可視化し、その傾向を明らかにした。

記述内容の分析から、学生は自由奔放な子ども像と対人技能の未熟な子ども像を多く持っていることが明らかとなった。また、多くの学生が子どもの自己制御や社会規範を身につけさせることを重視した教師像を持っていることがわかった。

本研究では、学生のもつ子ども像から演繹的に導き出された教師像を元に、学生のもつ教育観を検討した。そのため、当初学生が想起した子ども像に教師像が強く影響を受けていた可能性がある。今後は、対極的な子ども像を想起させ、それらに応じた教師像を記入させるといった工夫を行う中で、より幅広い教育観を捉えることが出来ると考えられる。

また、本研究ではグループワークによって他の学生の教育観に触れることで、学生の中にどのような変化が生れたのかまでは検討できていない。今後は、こうしたグループワークのプロセスを踏まえて学生の教育観の変化を捉える研究が必要と言えよう。

参考文献

文部科学省中央教育審議会 2012 『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）』

謝辞

本研究に協力して下さった受講生の皆さんに感謝いたします。